

世界史

I 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入せよ。

今からちょうど2000年前の西暦25年、劉秀が皇帝に即位した。劉秀に始まる王朝は一般に後漢と呼ばれるが、本来の国号は漢である。その200年ほど前に劉邦が建てた王朝も漢だったので、「前」「後」を冠してそれらを区別している。因みに、中国では後漢の都 が前漢の都よりも東にあったので、後漢を東漢、前漢を西漢と呼ぶ。中国史では、このように同じ国号の王朝が複数存在するので、それらを区別するために別の語を冠して呼び分けることがある。漢を国号とする王朝は代表的なものだけでも8つもある。それぞれについて見ていこう。

最初の漢は劉邦が創建した前漢である。劉邦は、始皇帝死去のすぐ後に勃発した反乱の中で頭角を現した。対秦戦争は項羽を中心に展開され、最初に秦の都 に入って秦を滅ぼした劉邦は論功行賞で漢中の王に封建された。その後、項羽の違約を理由に劉邦は反旗を翻し、項羽を滅ぼして前漢を創建したのである。

2番目の漢は冒頭に述べた後漢である。後漢は第3代章帝のあとに10歳の和帝が即位して以降、外戚による専横が続いた。成人した皇帝は外戚勢力の排除に宦官を利用したため、後漢後半期には外戚と宦官の権力闘争が繰り返されることとなった。そのような中で、儒学的教養を持つ官僚は宦官による民衆搾取を厳しく批判したので、宦官は の禁を起し官僚を排除したが、やがて、黄巾の乱が勃発、後漢帝国自体が実質的に崩壊してしまった。

3番目の漢は後漢滅亡後に劉備が を都として建てた王朝である。その支配地域が蜀の地域だったのでこの王朝は一般的に蜀と呼ばれるが、国号は漢で、それ故、蜀漢とも呼ばれる。劉備の即位前は曹操が中国全土を支配する勢いであったが、208年の赤壁の戦いで劉備と の連合軍に曹操軍が大敗したことで、三国鼎立の形勢が定まった。

4番目の漢は304年に劉淵が建てた王朝である。これより前、三国の分裂状況を統一した西晋は、いざという時のために宗室である 氏一族を各地に諸侯王

として封建し軍事力を持たせていた。ところが、第2代恵帝の暗愚さに乗じて外戚が専権を振るうと、その排除を名目として八王の乱が勃発した。八王は自身の軍事力を強化するために、前漢以来、中国本土内に移住してきていた北方遊牧民の末裔を自軍に取り込んだ。その一人が匈奴の劉淵で、彼はそれを機に勢力を伸張し304年に自立したのである。

5番目の漢は、劉淵が自立した頃、氏族の李雄が で自立した王朝である。当初、国号は成であったが、李雄の死後の後継者争いの中で位を篡奪した一族の李寿が国号を漢に改めた。それ故、一般的には成漢とよばれる。

6～8番目の漢は五代十国時代の3王朝である。 の乱の反乱軍武将から寝返った朱全忠が907年に唐を滅ぼし、 を都として梁を建国した。これを嚆矢として、この地域では梁・唐・晋・漢・周とめまぐるしく王朝が交代した。これら五代の国々も以前の同名王朝と区別するために、一般的には「後」を冠して後梁・後唐・後晋・後漢・後周とよばれる。6番目の漢は五代4番目の後漢である。

朱全忠が唐を滅ぼして後梁を建てると、唐の後継を標榜する李存勖は後梁を滅ぼして後唐を建てた。その後唐は、当時中国北方に勢力を築いていた遊牧・狩猟民である の援助を得た石敬瑭によって滅ぼされた。石敬瑭は後晋を建てると、石敬瑭の後継者が敵対的な政策をとったため は後晋を滅ぼした。 はこの機に華北統治を企てるも失敗して北帰した。この隙に乗じて劉知遠が建国したのが後漢である。その後漢が後周の郭威に滅ぼされた際に、逃れた宗室の一人が後漢の後継を標榜して即位した。これが7番目の漢で、中原の北の太原に都をおいたので一般的に北漢とよばれる。

この時代は中原に興亡した5王朝以外にも十余りの独立政権が併存していた。8番目の漢は唐から封州刺史に任じられていた劉隱が広東・広西で自立したことに始まる。劉隱の跡を継いだ弟が皇帝を名乗り、国号を漢とした。この漢は南方にあったので一般には南漢とよばれる。

劉邦が国号を漢としたのは、劉邦が項羽によって漢王に封建されたことに因むが、それ以降の漢は概ね建国者が劉氏であったことによる。しかし、後漢を建国した劉知遠が、隋の離間策で東西に分裂した にかつて属していた沙陀族の出身であるように、劉邦の劉氏とは血縁関係が無いにもかかわらず劉氏を名乗る者もいた。中国の歴史において劉氏はそれだけの価値があったということであろう。

Ⅱ 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句または数字を記入せよ。

春秋時代に孔子によって創唱された教説は、後に学問としては儒学と、三教のひとつとして仏教・道教に対しては儒教とそれぞれ称され、現在にいたるまで中国の社会・文化の形成に大きな役割を果たしてきた。

孔子は、道徳的な徳目として「仁」を、人間関係における秩序として「礼」を説いた。これは人間の本能である「性」に関する学説として、その後の の性善説や荀子の性悪説などを生み出していく。

さて、古代中国では、秦漢帝国の時期に統一国家や王朝の統治理念を模索するようになる。始皇帝は 家思想を採用することで中央集権を目指したが、その後の漢では、王朝の国家理念や正統の学問に儒学が取り入れられる。前漢の董仲舒は、儒学の理論により皇帝の支配を正当化し、その教えにそって皇帝のふるまいを正そうとした。また、漢代には つの文献が儒学の基本文献とされ、これら基本文献の字句を正しく理解するための注釈が加えられていく中で、儒教の国教化が進められていく。

その後、魏晉南北朝時代には、儒学の基本文献につけられたそれまでの注に対しても注釈がつけられるようになる。これを義疏ぎそと呼ぶが、そもそもは後漢以降に中国で定着していった仏教の経典を理解する手法に由来する。また、張角が創始した太平道や張陵による の結社以降、道教の信仰もこの時期盛んになっていた。すなわち、この時代において、儒教は仏教や道教に凌駕されていたともいえるよう。

その後、唐の滅亡にともなう戦乱のなかで貴族社会が崩壊し、新たな時代の担い手となったのは儒学の教養を身につけた士大夫であった。当時の王朝名を付して 学とも称される新たな儒学は、これまでの基本文献の注釈を越えて、宇宙の理ことわりが人間の従うべき規範であるとする新解釈を生み出していった。そして、こうした新解釈は科挙試験の基準となり、清朝末期の科挙の廃止まで継承されていくが、これが唯一の新たな解釈だったわけではない。「性即理」、すなわち、人は本来道徳性を備えており、このことが人間の本質であるとした 学に対し、明代には、人の道徳性と心（感情）とを区別し、心そのものが人間の本質であり、心と理こそ

が合致するとした **F** 学が提唱される。また、清代になると、理を自身の頭で論理的に組み立てるのではなく、儒学の古典に関する確実な文献を広く収集し、実証的に理解しようとする **G** 学が盛んになった。

このように次々と新たな展開を見せてきた儒学・儒教だが、近代以降は中国の後進性を象徴するものとして批判されるようになる。例えば、キリスト教の影響を受けた太平天国運動は儒教倫理を否定した。また、その後の対外戦争の相次ぐ敗北による王朝体制の動揺も儒教批判の論調を助長した。この傾向は新文化運動や1919年の五・四運動で頂点に達するが、それは、「民主と **H** 」という運動のスローガンのもと近代中国が近代西洋へ接続するために、伝統文化からの断絶を必要としたからであった。そして、儒教の排撃は、中華人民共和国の建国以降も継承される。そこでは、儒教は文化的後進性の象徴として、また、人々を惑わす迷信としてとらえられた。

ただ、近代以降の儒教は、批判・排除の対象となっただけではなかった。中国革命を推し進めた孫文の政治哲学には儒教の影響がうかがえる。また、蒋介石は、ファシズムの風潮と中国共産党との内戦のなかで、人々の生活様式や社会倫理の改革を提唱した **I** 運動を展開するが、この運動においても儒教的な倫理が見え隠れする。さらに、五・四運動や新文化運動における欧化思潮の氾濫に違和感を抱いたり、共産党政権下における伝統の破壊に危機感を覚えたりした人々は、戦後に国民党とともに台湾へ逃れたり、あるいは香港やシンガポール、アメリカに移り、西洋哲学の影響を受けつつ、儒学の持つ哲学的思惟を深化させ、その理論的体系の構築を目指した。

そして、中国大陸でも1980年代以降に儒教批判の流れに変化が見られるようになる。鄧小平の指示によって進められた経済改革と対外資本・技術の受容、いわゆる **J** 政策のなかで、伝統に対する過去の行き過ぎた否定への反省が儒教の再評価へと結びついていく。ただし、大陸の外で展開される儒教の再評価は国家の正統性を補完するものではないのに対し、大陸におけるそれは権威主義的な政治体制を補完するものという側面もあることを意識する必要がある。

Ⅲ 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句または数字を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

1202年、西ヨーロッパでは後世に大きな影響を与えるいくつかの事件が生じている。

最初に挙げられるのは第 回十字軍である。この十字軍は1204年に を征服してラテン帝国を建てたことでも知られるが、この十字軍が集合地ヴェネツィアを出発したのが1202年であった。ヴェネツィアは「アドリア海の女王」とも呼ばれる都市共和国で、東方貿易の覇権を と争ったことでも知られる。しかし、ヴェネツィアの繁栄はオスマン帝国が勢力を拡大するにつれて失われていくことになる。^{〔1〕}

1202年は、イングランド王であったジョンが支配していたノルマンディーにフランス王 世が侵攻した年でもあった。 世はノルマンディーなどをジョンから奪って王権の拡大に努めた。 世の時代には、南フランスなどで広がっていた異端の一派である 派に対する十字軍も始まっている。ただし、 派が制圧されて南フランスにもフランス王の権力が及ぶようになったのは、孫のルイ9世の時代であった。ルイ9世は、モンゴルに修道士 を派遣したことで知られる。

そして、1202年は、一般にはフィボナッチという名前で知られているピサのレオナルドが『算盤の書』を刊行した年でもある。有名な「フィボナッチ数列（0，1，1，2，3，5，8，13，…）」は彼が『算盤の書』で取り上げたもので、著者にちなんで名付けられた。彼の故郷ピサは、ヴェネツィアや と同様、中世に繁栄したイタリアの海港都市であった。レオナルドは、1192年にマグリブ地方^{〔2〕}を訪れて以降、主にマグリブやエジプトなどのイスラーム世界で数学を学んだ。数学の研究がイスラーム世界で早くから進んでいたからである。例えば、数学者・天文学者として知られている は、アッバース朝の最盛期にバグダードで研究をおこない、インド数学を導入することでアラビア数学の発展に貢献した。また、『代数学』などの彼の著作は、「12世紀ルネサンス」と呼ばれる中世西ヨーロッパにおける文化の復興運動の時代に、ラテン語に翻訳されてヨーロッパにも大きな影響

を与えることになった。このような流れの中に、レオナルドの『算盤の書』も位置づけることができよう。

レオナルドは神聖ローマ皇帝 世の知遇をも得ていた。 世はシチリア王でもあったためシチリア島や南イタリアに滞在することもあったが、北イタリアでは神聖ローマ皇帝のイタリア政策に起因する対立が激化しており、北イタリアの諸都市は 世に対抗して自治権を保持するために 同盟を結成した。

レオナルドは13世紀半ばにこの世を去り、レオナルドの故郷のピサも1284年の海戦で に大敗するなどして衰退し、1406年にはフィレンツェに征服された。そのフィレンツェは遠隔地貿易の中心地として、またイタリア＝ルネサンスの中心地^[3]として繁栄していく。

レオナルドとほぼ同じ時期に 世も没し、ほどなくしてドイツは、 家のルドルフ1世が即位するまで続くいわゆる大空位時代に突入した。 世が治めたシチリア島は、13世紀末に 王国の支配下に入る。その 王国が1479年にカスティリャ王国と合併して形成したスペイン王国は、16世紀、 家出身のカルロス1世とその子フェリペ2世の時代に最盛期を迎えることになる。

[1] オスマン帝国の艦隊がヴェネツィアやスペインなどの連合艦隊を破った1538年の海戦を何というか。

[2] 12世紀末にマグリブやイベリア半島を支配していたイスラーム王朝を何というか。

[3] フィレンツェで活動したルネサンス期の画家で「ヴィーナスの誕生」などの作品で知られる人物は誰か。

[4] この時のカスティリャ王は誰か。

Ⅳ 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

ユーラシア大陸の中央部、現在の中央アジア5か国と中国の新疆ウイグル自治区を中心とする地域は、伝統的に「トルコ人の居住する地」を意味する A と呼ばれてきた。ここでは、パミール高原西方の西 A の歴史を、主に南部のオアシス地域マー=ワラー=アンナフルを中心に見ていこう。

^{〔1〕}
マー=ワラー=アンナフルは元来、ユーラシア大陸の陸上交易で栄えたソグド人をはじめとするイラン系の人々が多く居住する地域であった。9世紀後半に成立し、この地域とイラン東部を統治した B 朝もイラン系の王朝であった。しかし、トルコ系の王朝として初めてイスラームを受容した C 朝が10世紀にマー=ワラー=アンナフルに侵攻する。さらに、999年に中心都市ブハラを占領し地域一帯を支配下におさめた。この出来事は、この地域でトルコ系の人々が優越する端緒となった。この後、トルコ系王朝が相次いでマー=ワラー=アンナフルを支配し、その下でトルコ系の人々が流入してくるようになった。ただ、オアシス都市に住む定住民にはイラン系言語を話す人々が依然として多く、言語面でのトルコ化は緩やかに進んだ。

モンゴルの征服活動の結果として、A ではチンギス=ハンの次男の子孫による D =ハン国が成立したが、この国家は14世紀半ばにパミール高原を境として東西に分裂した。マー=ワラー=アンナフルを含む西 D =ハン国で台頭したのが E である。彼はトルコ化したモンゴル貴族の出身であり、卓越した軍事的才能によって大帝国を築き上げたほか、モンゴルの征服活動で破壊された F を都とし、大規模な建設活動を行った。また、E 朝の第4代君主 G =ベクをはじめとする彼の子孫は、天文学などの学問・文化活動の保護・支援も行った。

15世紀末になると、マー=ワラー=アンナフルにはトルコ系のウズベク人が創建したシャイバーン朝が勢力を伸ばし、16世紀初めまでに E 朝を滅亡させた。その後、1510年に当時の君主がサファヴィー朝のイスマール1世との戦争で敗死したものの、^{〔2〕}混乱状態は短期間で收拾され、以後16世紀末に至るまでシャイバー

ン朝が西 A 一帯を統治した。

なお、15世紀に「大航海時代」が到来した後、ユーラシア大陸の内陸交易は衰退を始めたと従来は考えられてきたが、近年の研究ではそれ以降も A をめぐって活発な交易が行われていたことが分かっている。とりわけ、18世紀初めにフェルガナ地方に成立したウズベク系のコーカンド=ハン国は中国とロシアとの中継交易によって栄えた。現在のウズベキスタンの首都である H も、この国家の下で交易都市として発展した。

19世紀後半になると、ロシアが北方からマー=ワラー=アンナフルに進出してきた。ロシアはまずコーカンド=ハン国領に侵攻し、H を占領して1867年にここに総督府を置くと、1876年には同国を完全併合した。これに前後して、ロシアはブハラ=ハン国と、ホラズム地方を根拠地とするウズベク系の I =ハン国にも攻撃を仕掛けた。両国はともにロシア軍に敗北し、領土を削減されたうえでロシアの保護国となった。こうして西 A 全域がロシア領となった。1861年に J 戦争が発生しその影響でアメリカからの綿花輸入が困難になると、ロシアは綿花供給地としてマー=ワラー=アンナフルに注目し、この地域での綿花栽培とロシアへの輸送を奨励した。

ロシア革命で帝政が崩壊すると、A では1918年に革命勢力によって自治共和国が創設された。また、保護国であったブハラと I でも、1920年にソヴィエト政権の軍隊である K 軍の後押しを受けた革命が起こり、それぞれにソヴィエト政権が樹立された。ただ、この時に創設された政権は1924年以降に再編され、1930年代半ばまでにソヴィエト連邦を構成する5つの社会主義共和国となった。^[3] これらの国家が現在の中央アジア5か国の前身となる。この再編は、トルコ系の人々を「ウズベク」「カザフ」といった「民族」に区分し、それぞれの「民族」が主体となる共和国を創設するものであった。この政策の下では、ソ連中央の設定した「民族」を超える人々のまとまりを構想することは危険視され、トルコ系の人々全体を包含しうる A という言葉の使用も公的には避けられるようになった。A という言葉が再び使用されるのは、1980年代後半の L（再建／改革）によってソ連共産党支配体制の根本的な見直しと改革が行われた後のことである。

- 〔1〕 マー=ワラー=アンナフルの西南方に隣接する地域は伝統的に「イラン」と呼ばれてきたが、イラン地域の東北部で前248年ごろに成立し、メソポタミアに至る広大な領域を支配してローマ帝国とも対立したイラン系の国家を何というか、カタカナ5文字で答えよ。
- 〔2〕 イスマーイール1世がサファヴィー朝を創建した当初に都とした、イラン北西部の都市を何というか。
- 〔3〕 旧ソ連を構成した社会主義共和国のうち、中央アジア5か国を含む11か国は1991年12月に新たな共同体を形成した。この共同体の略称をアルファベットで答えよ。